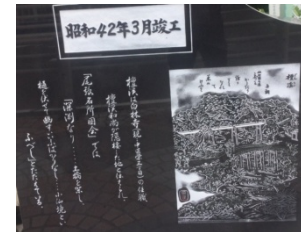


## 山崎川をゆく(6)

山崎川を 5 回にわたりレポートしてきたが、なかなか奥が深いことを実感した。一応のシリーズ「最終回」として、檀溪橋を選んだ。これには「わけ」があるが、いずれまた。

地下鉄鶴舞線「いりなか」で降り、地図を見ながら檀溪橋をめざした。坂道がつづく住宅街を進むが、豪華な住宅に目がとまり、どうも方向を間違えたようだ。

じつは前にも駆け足で行ったが、ぐるりと一周してしまった。今回もまたかと案じたが、なんとか檀溪橋にたどり着いた。ずいぶん昔を思い出しながら、ドイツ語で「ダンケ」と言いたくなった。



写真の「檀溪跡」案内から。「北から流れる山崎川が、ここ檀溪橋あたりから湾曲して、丘陵の裾に沿って南流するところ、昔、文人墨客が足を運んだ小仙境であった。『尾張名所図会』に「川名川の下流にして深淵なり。この辺十五軒屋と呼ぶ地より新豊寺山へ至る道にて土橋を架し樋を伏せて幽邃いふばかりなし」とある。

名大図書館で見つけた『生きている名古屋の坂道』の一節を思い起こした。 — 名古屋市昭和区檀溪通り付近の山崎川に沿った地域は、名古屋の東の町並みはずれであって、人家も少なく、東郊第一の名勝の地であった。それは、高級住宅地となった現在では想像もできない。



檀溪は、山崎川が東部の丘陵地帯と、西部の平野地帯との間を区切る部分をいうのであって、丘陵の山裾に沿って湾曲して流れ、水、崖、樹木がつくる風景は、まことに幽邃であった。一と、尾張名所図会などの古い書物にもものせられている。(写真下は先に紹介した『尾張名所図会』から)

この溪流の中心をなすところに土橋があり、これを檀溪橋と呼んだ。昔からこの付近の景は詩人、文人、墨客にほめたたえられ、多くの名作品を残している。

山崎川は、檀溪地帯の勝景地をつくり、東部の丘陵地の裾をめぐるって南下する。現在の石川橋付近でやや丘陵地とはなれ、西南地帯に流れる。

(2017年6月10日)